

松田素二編、『アフリカ社会を学ぶ人のために』世界思想社、2014年、322 p.

伊藤義将\*

本書の目的は、序章に明確に書かれているように「二十一世紀の人類社会の未来に貢献するアフリカの潜在的な可能性（アフリカの潜在力）を明らかにすることにある」（p. i）。本書の定義に従うと「アフリカの潜在力」とは、新しい時代や外来の思想と結びつくことによって、創造または改変されながらアフリカ社会が育んできた知恵や制度である。なぜ、「アフリカの潜在力」を明らかにする必要があるのかという点について編者は、激動するアフリカ社会に生きる人々が「アフリカの潜在力」をいかに再創造し、再編成してきたのか／いるのかに注目することで、アフリカに対して多くの日本人が抱くイメージと誤解を打壊し、アフリカに注ぐ「まなざし」を変化させることが可能になるからであると述べる。まず、目次から本書の内容を概観しよう。

序 アフリカの潜在力に学ぶ（松田素二）

第 1 部 多様性を学ぶ

1. 民族と文化（松村圭一郎）
2. 言語（小森淳子）
3. 生態環境（伊谷樹一）
4. 生業（曾我享）

第 2 部 過去を学ぶ

1. 人類誕生（中務真人）

2. 古王国（竹沢尚一郎）
3. 奴隷交易（宮本正興）
4. 植民地支配と独立（津田みわ）

第 3 部 同時代性を学ぶ

1. ポピュラーアート（岡崎彰）
2. ライフスタイル（松田素二）
3. 結婚と家族（椎野若菜）
4. 宗教生活（近藤英俊）

第 4 部 困難を学ぶ

1. 政治的動乱（遠藤貢）
2. 経済の激動と開発援助（峯陽一）
3. 自然保護と地域住民（岩井雪乃）
4. 感染症（嶋田雅暁）

第 5 部 希望を学ぶ

1. 在来農業（重田眞義）
2. 相互扶助（平野美佐）
3. 紛争処理（阿部利洋）
4. 多文化共生（松田素二）

「多様性を学ぶ」と題された第 1 部はまず、アフリカの多様性はそれをみる枠組みによって多様に変化すると指摘する。たとえば「民族と文化」「言語」「生態環境」「生業」という枠組みでアフリカの多様性を眺めると、それぞれの枠組みにおいて多様性が高いことに変わりはないが、それらが地図上できれいに重なり合うことはない。つまり、アフリカの多様性の多重性が示されるのである。そして、このような多様性は固定的でア priori にあるものではなく、アフリカの社会・経済状況の変化に呼応して絶え間なく変化しながら、生み出されている点が第 1 部では強調される。

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第2部は「アフリカには歴史がない」という偏見を「人類史」「古王国」に注目することで払拭する。たとえば、人類史においてアフリカは文化発展の中心であり、アフリカの「古王国」は中東・地中海地域におけるイスラーム世界の繁栄、ヨーロッパ世界の発展に寄与した、世界史のキーアクターだったことを指摘する。次に取り上げる「奴隷貿易」と「植民地政策」では、これらがアフリカの過去ではなく、今も社会に影を落とす「現在」であることを強調する。たとえば、植民地政策下に確立した民族単位は、今や人々にとって意味ある社会集団となり、植民地支配の過去に抗議する主体ともなっている。このように、第2部ではアフリカ社会の「過去」と「現在」のねじれた関係を描き出している。

第3部の「同時代性を学ぶ」はポップアートと携帯電話を事例に、外部世界から導入された新しいモノが現地の人々によって都合の良いかたちでアフリカ社会に取り込まれている状況を描き出す。後半では、結婚と宗教がテーマとして取り上げられ、前半部分とは逆に、アフリカの人々の日常実践が、近年の社会変容に伴って生じている現代的課題を和らげるバッファー機能を保持していることを示唆する。

第4部の「困難を学ぶ」では、アフリカが過去数十年抱え続けてきた問題の「現在」が解説される。たとえば、政治的動乱の主体の変化である。20世紀の動乱の主体は、独立を目指す解放組織、冷戦構造下で支援された国家などだったが、21世紀の動乱の主体は資源獲得を狙う軍閥であり、問題は以前に

も増して複雑になっている。経済状況に関しても、これまで援助の対象であったアフリカは、人口の増加により世界経済の牽引役になろうとしているものの、土地不足というアフリカが経験したことのない新たな問題が差し迫っている点が述べられる。アフリカの自然保護においても自然を守るだけではなく、自然を守りながら現地の人々の生活を守ることが重要な課題となっている。ここでは、過去数十年間、日本人がアフリカに対して抱く「紛争」「経済の停滞」「野生の王国」というイメージはほとんど変化していないにもかかわらず、問題の質は大きく変化し、その動向に注視する必要に我々読者は気づかされる。

最終部の「希望を学ぶ」では、これまで失敗、発展の阻害要因と考えられてきたアフリカの人々の日常実践が再評価される。たとえば、アフリカの農業が直面してきた危機はアフリカの農業が内包する問題ではなく、外部から導入された思想や政策によって引き起こされたものである点が示される。経済的成功者の足かせになると考えられがちな「相互扶助」についても、先進国の社会問題に光を投げかける大きな可能性を秘めていることが示唆される。最後に、多くの民族が共に暮らし、多くの紛争を経験してきたアフリカは多民族共生と和解に寄与する有効な知恵と制度を創りだしている先進地であり、我々が学ぶべき点が多いことが示される。

本書の特徴を2つあげよう。ひとつめの特徴は、日本人がアフリカに注ぐ「まなざし」を変化させるために緻密な作戦が練られている点である。これまで出版されてきたア

フリカを知るための入門書の多くは、扱うテーマに偏りがあつたり、多くのテーマを扱いきり過ぎて、それぞれのテーマの関係性がみえにくかつたりした。本書では取り扱うテーマがていねいに選ばれているため、本書全体の「流れ」を楽しむことができる。序章にも書かれているが、第1部で「単一のアフリカ観」を脱するためにアフリカの多様性が示されたのちに、第2部でアフリカの歴史が世界史に果たした役割が示される。それによって「歴史なきアフリカ」という多くの日本人が抱くステレオタイプが打ち壊される。第3部で、今を生きるアフリカの人々の姿が示されることで、読者はアフリカ社会と自分が生きる社会の接点を意識させられるだろう。このような手続きののちに、アフリカが抱える問題が提示されるため、読者はそれらが決して遠い異国の出来事ではないという点を強く意識せざるを得ない。そして、最終部でアフリカ社会が育んできた制度や知恵を再創造・再編成しながら、直面する課題を解決しようとするアフリカの人々の姿を描くことによって、読者はアフリカから学ぶべき点を確認することが可能となるのである。

ふたつめの特徴は、本書を開いた瞬間にアフリカに引き込まれる仕掛けが施されている点である。まず、目次を眺めた瞬間に少しでもアフリカに興味がある人間ならば、すぐさま本書の魅力に引き込まれるであろう。なぜなら、そこには、アフリカという言葉聞いて日本人が連想する言葉が各章のタイトルにちりばめられているからである。たとえば「紛争」「貧困」「野生動物」「食糧不足」「復

興」「結婚」「芸術」「宗教」などである。アフリカに初めて触れる学部生にアフリカのイメージを尋ねると、上述したようなキーワードが彼らの口から発せられる。研究だけではなく、長年教育にも携わってきた編者の経験がここに大いに生かされている。また、アフリカに触れたことのない人々にとってありがたいのは、本書に収められている以下の5編のコラムである。

「アフリカのなかのアジア」(飯田卓)

「西アフリカ発掘事始め」(竹沢尚一郎)

「排外主義の台頭」(山本めゆ)

「ゴリラ・ツーリズム」(山極寿一)

「いちばん新しい独立国」(栗本英世)

その道のアフリカ研究の第一人者がアフリカの現況を読みやすいかたちで描いている。これもまた、アフリカ入門者を引きつける重要な要素となりうるだろう。

ひとつ残念な点は、「アフリカの潜在力」が日本人のアフリカ研究者が考えた、独り善がりなアフリカをみる視点ではないのか、という疑問が頭を過る点である。実際にアフリカで生活している人々は本書で扱われる「アフリカの潜在力」という枠組みを、どのように考えているのかが気になるのである。想像の域を出ないが、おそらく「アフリカの潜在力」という考え方は編者や執筆者の頭の中だけで創られたものではないはずだ。現地で生活するアフリカの人々や、アフリカ出身の研究者などと議論を積み重ねたうえで生成されてきた考え方だろう。彼らから得たインスピレーションや、彼らと行なってきた議論の一端など「アフリカの潜在力」という

考え方が生成される過程や、「アフリカの潜在力」という言葉をめぐって、日本人研究者とアフリカ出身の研究者との間で現在繰り返されている議論について、少しでも触れられていれば、「アフリカの潜在力」という考え方が日本人研究者による独り善がりな考え方ではないということは明示されたいだろう。そうすることによって、「アフリカの潜在力」という言葉を使う意義がより明確になり、各章の説得力が増したかもしれない。

いずれにせよ本書が日本人のアフリカ観を大きく変える一冊であることには変わりはない。アフリカ経済の急成長に伴って日本・アフリカ関係が変化しつつある今、まったくアフリカに興味関心を抱いていなかった人々の前に突如アフリカの姿が立ち現れることも珍しくないだろう。少しでもアフリカに興味をもち始めた方々が、最初に手に取るべき一冊としておすすめしたい。

Muhammad Hakimi Bin Mohd Shafai.  
*Islamic Finance for Agricultural Development in Malaysia*. Kyoto: Center for Islamic Area Studies at Kyoto University, 2013, xi+283 p.

上原健太郎\*

商業銀行としては1975年に登場し、現在に至るまで拡大・変容を続けるイスラーム金融は、その発祥地である中東諸国のみならず、東南アジアにおいても、その発展を顕

著に示してきた。その立役者といえる存在が、イスラーム金融システムの育成・拡充に努めてきたマレーシアである。特に、同国は農業をはじめとするさまざまな産業分野に対してシャリーア適合性（イスラーム法への適合性）を担保するイスラーム金融の商品開発を行ってきた。京都大学イスラーム地域研究センターのブックレット・シリーズ“Kyoto Series of Islamic Area Studies”の第9巻目として刊行された本書は、ムザーラア (*muzāra'a*) とムサーカート (*musāqāt*) というイスラーム金融商品を基にした「農業における生産物・損失分配」(Agricultural Product and Loss Sharing, 以下 aPLS) モデルがマレーシアの農業、特に休閑地の活用において有効であることを示し、またその導入を提案している。

本書の著者であるムハンマド・ハーキミー・ビン・ムハンマド・シャーフィイー氏は、マレーシアのマラヤ大学にて学士号と修士号を、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科において博士号を取得した後、現在マレーシア国民大学経済・経営学部にて在籍している。本書は、2012年3月に京都大学へ提出された博士論文を基に加筆・修正したものであり、イスラーム法学の原典研究、近代イスラーム経済学の理論研究、また臨地調査という3つのアプローチにより構成されている。

本書は、以下の序論、および6つの章で構成されている。

#### 序論 歴史的背景

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科